

平成 30 年度

病害虫発生予察特殊報(第 1 号)

平成 30 年 8 月 28 日

神奈川県農業技術センター

病害虫名 : ナスコナカイガラムシ (学名 : *Phenacoccus solani* Ferris)

作物名 : キュウリ (施設)

1 発生経過

平成 30 年 6 月、県内の施設キュウリほ場において、キュウリの茎葉にコナカイガラムシ類が寄生しているのが確認された。横浜植物防疫所に同定を依頼した結果、本県ではこれまで未確認のナスコナカイガラムシと同定された。

2 形態および生態

(1) 形態

雌成虫は長楕円形で体長 3 ~ 5mm 程度。体色は灰色で体表は白色粉状のロウ物質で覆われている。体周縁のロウ物質の突起は 18 対あるが短く目立たない。

(2) 生態

本種は単為生殖を行い、雄は知られていない。卵胎生のため雌成虫は卵のうを形成せず、直接産仔する。1 雌の産仔数は約 200 とされている。幼虫は 1 ~ 3 齢を経て成虫となる。1 年に数世代を繰り返す、年間を通じて幼虫の発生が見られる。

なお、ソラマメ催芽種子で飼育(25℃)したところ、1 雌の産仔数は平均 107(n=8)、孵化から産仔までの期間は最短 30 日であった。

3 被害および分布と寄主植物

(1) 被害

キュウリでは主に茎葉への寄生が多く見られ、多発すると果実にも寄生する。幼虫、成虫の吸汁による生育阻害や、排泄物に起因するすす病によって、葉や果実の外観品質が低下する。

(2) 分布と寄主植物

国内では、平成 15 年に高知県で初めてピーマン、シントウ、ナスでの特殊報が発表され、その後、長崎県、愛知県など 14 府県で特殊報が発表されている。

海外では北米、中南米に広く分布するほか、寄主植物と共に移出、定着したものがハワイ、ミクロネシア、南アフリカなどで発見されている。

広食性で、雑草を含むキク科、アブラナ科、ナス科、ウリ科、マメ科など多くの植物での寄生が確認されている。

4 防除対策

(1) 現在のところ、キュウリでは本種を対象とする登録農薬はない。

(2) ほ場内をよく観察して早期発見に努め、見つけ次第捕殺するか、発生部位を除去する。

(3) 本種は寄生範囲が広く、観葉植物や雑草などにも寄生するため、施設内への観葉植物等の持ち込みを控え、施設内外の除草に努める。

(4) これまでの発生事例では、本種は無農薬栽培や天敵を導入した減農薬栽培での確認が多いため、減農薬栽培においては特に注意が必要である。

(写真)



図1 ナスコナカイガラムシ成虫 (キュウリ葉上)



図2 ナスコナカイガラムシ成虫と幼虫 (キュウリ葉上)



図3 ナスコナカイガラムシ成虫と孵化幼虫 (飼育個体)



図4 キュウリ葉上への寄生とすす病の発生



図5 キュウリ葉裏への寄生



図6 キュウリ葉柄への寄生



図7 キュウリ果実への寄生

神奈川県農業技術センター 病害虫防除部
〒259-1204 平塚市上吉沢 1617
TEL 0463-58-0333 FAX 0463-59-7411
<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/cf7cnt/f450002/>